2022
11月号
No.19

拓く通信

第21回ポレポレ祭り「夢気球トリビュートコンサート」

理事長メッセージ⑨　社会福祉法人拓く　理事長　馬場　篤子

戦後77年、日本はめざましい復興をなしとげ、0歳からの保育体制、特別支援教育での支援体制や学童保育、放課後等デイサービス（親の働く保障）、そして自宅でなくとも施設や病院で看取りができるという社会保障制度が整いました。一方で、わたしたちは国、制度に頼るようになり、人間に定められた「生老病死」※の下で、生きるための大切な備えを怠っているように思います。どんな環境や姿かたちで「生まれて」も、誰しも「四苦」から逃れられません。「老いる」「病気になる」「死ぬ」は年老いてからの問題と捉えがちですが、子どもも青少年も生きていく上で様々な「苦しみ」をもっています。人間関係のわずらわしさの無いドライな社会保障制度の下だけでは、この問題を解決できないのです。人生の苦難の際に寄り添ってくれる人がそばにいることが、わたしたちの暮らしの備えになります。世界中での理不尽なできごとを他人ごとと思わず、自分ごととして、生きづらさを抱えている人に関わっていくことが大事なのです。当法人でも意識変革の機運が熟してきました。

11月3日（祝）、夢工房35周年を記念して第21回ポレポレ祭り「夢気球トリビュートコンサート」を開催しました。夢工房設立と長年実施していた「夢気球コンサート」そのものに当法人の原点があります。1981年「国際障害者年」、特別支援学校の若き教員たちが、「重い障がいがあっても地域の学校へ通ってほしい」「卒業後も遠い地の入所施設でなく地域で暮らしてほしい」との目標を掲げ、多くの方々とつながり、勤務外の時間を費やしての無認可作業所づくり、資金集めを。自分自身が交通事故によって障がい者になったとき、老いてせん妄が起きたとき、隣人や友人が支えてくれるような社会であってほしいと願ったからです。

今こそ、制度頼りや「自分だけ家族だけよければいい」という考えから脱却を。回り回って自分の暮らしとつながると捉え、「生老病死」をテーマとして助け合う関係づくりをしていきましょう。つまりわたしたちの暮らしをわたしたちの手に取り戻すのです。当法人も「地域食堂」「混ざり合いの暮らし」「本業＋α」の取り組みを真剣に進めていきたいと思います。

※仏教の言葉。人間がこの世で避けられない四つの苦しみ。生まれること、老いること、病気になること、死ぬこと。

CONTENTS
● 特集　第21回ポレポレ祭り「夢工房球トリビュートコンサート」… 2・3
● 特別寄稿　命と存在を支え合う　故 廣瀬明彦氏 … 4
● グループホームの暮らし … 5
● 混ざり合いの暮らし … 6
● 本業＋α … 7
● （一社）ほんによかね会　地域食堂 … 8

拓く通信
2022年11月号（年2回発行）発行：社会福祉法人 拓く　法人本部　〒830-0071 福岡県久留米市安武町武島468-2　TEL 0942-27-2039

（一社）ほんによかね会　地域食堂

お弁当の配食業務に挑戦中！
100歳になっても、地域食堂で輝けるようなステージを創る。

ポレポレ利用者は2020年より職員と共に「地域食堂①」の業務に励んでいます。
日常的に地域住民と力を合わせる場面を創りたい。
一歩も二歩も踏みこんで生まれた掛け合わせは、利用者×やりがい、チャレンジ×若手、作り手×食べ手など。
今年9月、お弁当の配食業務を始めました。

ポレポレ居宅介護支援センター　管理者　小川　真太朗

2009年に「三原さん家」から始まった地域食堂は今年で14年目。当時73歳だった三原さんは87歳、今もお元気で、（一社）ほんによかね会②の運営となった地域食堂にて活躍されています。三原さんたちの世代は次々に作り手も食べ手も連れてきて、コンベクションオーブン（大量調理機器）を使わずに50食を手作りし、さらにお客様をもてなしておられます。私たち30代の世代には、そんな「チカラ」が備わっていないことに気づかされます。一緒に立ち働いてくれる仲間を探し、実際に人様に食べていただく料理を作り、相手の気持ちに寄り添いおもてなしをすること、その全てがチャレンジとなるのです。

同世代の人に加わってもらおうと思っても、断られたら、と踏みこめない時期もありましたが、何より誘った若者たちが3年続けて参画し、あーだこーだと言いながらメニュー決めや食事作りをする姿に、みんな楽しみになったのだと実感します。地域食堂の大先輩のように、日頃から相手を想い、つながっておくこと、いざというときに頼れる、助けてくれる仲間を増やしていくことは、私たちが「老いる」「病気になる」という状況になっても、地域で暮らし続けるために必要な備えだと思います。

今年9月より試行期間を設け、安武町でお弁当の配食を開始。地域の広報やふれあいの会、民生委員の方々の協力を得て、一人暮らしや外出が難しい方々にお弁当を届けています。「家族は週末に来るけれど、平日は一人で食事」「ご飯作りがつらくなってきた。助かった」という声を聞きました。コロナ禍や豪雨など困ったときのために「支え合える仕組み」を作っていきたい、と意を強くしました。まだまだ、ひよっこの私たち。支えるより支えられるほうが多いですが、三原さんたちが、そして地域の皆さんが、90歳になっても100歳になっても、地域食堂で輝けるようなステージを創りたい。若い世代の私たちの役割だと信念をもって取り組んでいきたいと思います。

①（一社）ほんによかね会の活動拠点施設「JAくるめ安武農産物直売所そらまめ」にて、18チームのボランティアが主体となり地域住民に食事の提供を行う。（月～土・6回／週）

②住民の支え合いの組織。安武町を元気にしようと直売所、地域食堂の運営をする。

※当法人は、公益事業の一環として（一社）ほんによかね会の活動に参画しています。

後列中央：小川　右：三原さん

社会福祉法人拓く　1970年代より久留米市で展開した障がい児の保護者と教員による統合教育運動が原点。2000年10月法人設立。障がいが重くても誰もが地域で暮らすために「コミュニティづくり」に取り組んでいます。

事業所　出会いの場ポレポレ・夢工房・グループホーム・ポレポレ居宅介護支援センター
出会いの場Leo・相談支援センターカリブ・久留米市西部障害者基幹相談支援センター

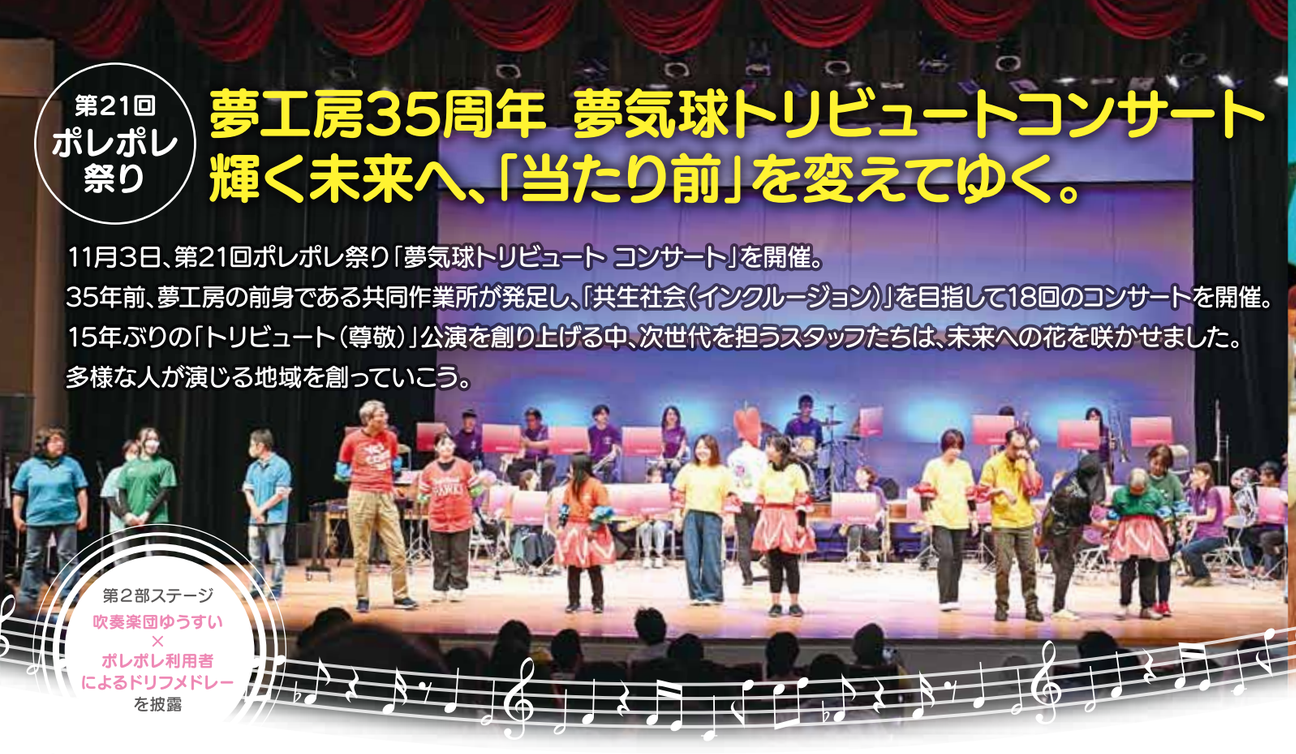
拓くウェブサイト QRコード

活動を更新中！

第21回
ポレポレ祭り

夢工房35周年　夢気球トリビュートコンサート
輝く未来へ、「当たり前」を変えてゆく。

11月3日、第21回ポレポレ祭り「夢気球トリビュート コンサート」を開催。
35年前、夢工房の前身である共同作業所が発足し、「共生社会（インクルージョン）」を目指して18回のコンサートを開催。
15年ぶりの「トリビュート（尊敬）」公演を創り上げる中、次世代を担うスタッフたちは、未来への花を咲かせました。
多様な人が演じる地域を創っていこう。



第２部ステージ
吹奏楽団ゆうすい
×
ポレポレ利用者
によるドリフメドレー
を披露

2001年
「夢気球コンサート」

終演後、
バンドメンバーと
実行委員が
集まった。

「障がい者が、地域で働く姿を当たり前にしたい」

1987年、久留米養護学校（現・久留米特別支援学校）の教師、親たちは卒業後の障がい者の働く場を地域に創ろうと決意。当時、重症心身障害者にとって卒業後の居場所は、在宅か遠方の入所施設が「当たり前」だったのです。教師や親たちは一人一人に踏み込んで話をし、仲間を増やしていきます。

「作業所を開こう。資金集めをしよう。バザー、物販だね」

歌や楽器演奏が得意な教師らがいました。

「コンサートもしようよ」

こうして、18回に及ぶ「夢気球コンサート」が始まったのです。それはたんに演奏や歌を聞かせるだけの楽しい音楽イベントではありませんでした。障がい者の権利や「命」「愛」「平和」への願いを歌にのせて強烈なメッセージを打ち出し、ステージに立つ側も聴く側もどちらでも、教師や障がい当事者、仲間、家族、知人友人が混ざり合い、主催者の想いを会場全員で共有しようとする場を創り上げていったのです。

1988年に開所した共同作業所「夢工房」は、当法人と2007年に合併し、２年後には飲食店「FOODS CAFÉ YUME」を併設、後年は企業への施設外就労、さらには企業との委託業務就労に取り組み、地域で多様に働くというチャレンジを重ねています。また、開所の時から職員と障がいのある利用者で製造・販売している「夢クッキー」とケーキ類は20種類以上も手がけて、今なお多くの人々に愛されています。

35年前、夢気球コンサートに関わった小中学生たちは40代になって小中学生の親に。今回、会場には大勢がご家族と共に駆けつけてくれました。彼らの子どもたちにとって、今や日本社会では、障がい者が地域で働くのは「当たり前」になっています。コンサートを通し、改めて「自分の価値観」や「当たり前」が変わっていくことで、歴史は自分たちで創っていけるものだと伝えられたと思います。

第２部ステージ
吹奏楽団ゆうすい×元夢気球バンドの
樋口先生と子どもたち

会場は満席。
多くの皆様に観ていただいた。

ボランティア同士の
交流の場が生まれた

高校生が受付を担当

統括本部長　北岡　さとみ

障がいの有無ではなく、誰しもが生きづらさを抱えている現代。少しの配慮があることで…ありのままの姿を表現していくことで…受け入れていく世の中に変わっていくことで…居心地の良い空間を創り出すことができると思います。今回のコンサートでは、いろいろな人がいるということを見て感じて知ってもらうきっかけを作りたいと思いました。同世代や同調する人だけが集まるステージではなく、３歳から70歳まで多様な人々が同じ場に立ち、演じ、想いを１つにするステージ。それを創り上げる難しさ、「当たり前」を変えていく生みの大変さはありましたが、会場で混ざり合う人々の姿を見た時、お互いを理解し、ありのままを受け入れることができたら、「何か」を少しずつ変えていけると確信しました。

夢気球
トリビュート
コンサート
報告

多様な人が演じる
地域を創りたい

今回は「輝く未来へ」をテーマに、
ステージ関係13団体・学校関係
かつてのコンサート自体
初顔合わせの高校生や
そして教師の皆さんの門

当時と同じ石橋文化ホールで開催。
５団体等、約300名が参画。
を知らないスタッフが、
大学生、専門学校の生徒たち、
を叩くことから始めました。

夢工房　管理者　野上　真紀子

多世代が混ざり合うステージの練習に立ち会いました。わたしたちスタッフの「当たり前」と他の皆さんの「当たり前」に大きな違いを感じて、悩み、諦めそうになることも。最初は一方的な思いが飛び交って、お互いにうまくキャッチできない。つながり方を手探りするうちに、自分たちだけの空間だったはずが、気づくとみんなの空間になっていて、混ざり合いが始まったと感じました。本番当日は、全員が同じ目的に向かって、相手を思いやり、分かり合い、助け合って一つのものを創り上げていく時間、空間を共有できたと思います。つながりや関わりを持ち続けていくことは簡単ではありません。熱い思いと揺るがない信念がなければ。そこに達するにはまだまだですが、スタート地点に立ったような気がします。

2011年2月「生き方を探るシンポジウム」（当法人は事務局）にて。
ポレポレ利用者野田氏と並んでの廣瀬氏（中央）・馬場理事長（左）

2003年、地域支援の勉強で廣瀬明彦氏と出会いました。「自分の地域で全国フォーラムを開催する時代ですよ」と何度も来久され、1000人規模の「フォーラムinくるめ」開催、ホームヘルパー養成研修、ショートステイ、レスパイトケア、ミドルステイ事業等、先駆的な事業展開に背中を押していただきました。2008年に進行性がんを発症、2011年の東日本大震災の支援、そして2013年1月に逝去されました。

今回、執筆されていた『爺さんのひとりごと』より抜粋編集して紹介させていただきます。

（理事長　馬場篤子）

特別寄稿

石巻の施設における支援を通して―。命と存在を支え合う

社会福祉法人「相楽福祉会」　元理事長　故 **廣瀬　明彦**

1952年生まれ、京都「相楽共同作業所」開設。社会福祉法人「相楽福祉会」理事長、グループホーム同居人（22年間）。

「生きづらさ」という括り

2011年３月16日より、被害の甚大な石巻市の障害者施設に向かいました。入居者・通所者を24時間支援し続けるのみならず、「馴染みにくい」地域在住の精神障害の方や自閉症の方、重度身体障害の方等、家族も含めて２次避難としてお連れして、自ら被災されているのに残ったスタッフが合わせて支援にあたられているという状況でした。電気や水道、ガス等のライフラインが全く壊滅している中です。避難所での暮らしは想像を超えるものがあるでしょう。「生きづらさ」を抱えてしまいます。全く体験したことのない見通しの立たない暮らしに対する混乱もまた、自閉症の方々だけではないと思います。

「障害のある、なし」ではなく、「生きづらさ」という括りは、発想として極めて大切と思います。社会的に加重される一人ひとり大きく違う「生きづらさ」に対して、「個別の支援」が必要になる。これを「インクルージョン」というのかもしれません。「障害」という括りだけではなく、「生きづらさ」を背負わされた人にとっては、それぞれの生育の歴史、環境、夢、希望、生きがい、楽しみ、嗜好等全て違うはずです。だからこそ、できうる限り早く、そして少しでも個別の支援が確立されるよう社会が、市民が永続的に考え行動する必要があると強く感じます。

「支援」、人としての立場からの出発

支援する人々は、「こうあるべき」、あるいは「こうありたい」という像を持っている方が多いと思います。強くあるべきと思っている方、指導教育者としての自覚を持っている方、専門職であると強く思っている方･･･。このような中に、私たちの生業を「仕事」あるいは「労働」として捉えている方が案外多いのではないでしょうか。

前述の石巻の施設における支援内容は、利用者や支援者にそっと寄り添うことが大切と思う、というのが現地へ志願して行った多くのスタッフの言葉でした。家族が行方不明で、家に帰る手段も自宅があるかも分からないという状況下の支援者が、「思い」を吹っ切るように、そして両肩にかかる責任感を必死に持ちこたえつつ支援にあたられている。喪失感や絶望感、そして過労の中で、言わば「軽躁状態」ともいえる中でのがんばりに胸を打たれた、というのも応援に行ったスタッフの言葉でした。

今、目の前に起こっている状況の中で必死の思いで支え続けなければという姿は、単純に「仕事」や「労働」ではないと思います。また、障害のある方々の個別支援やノーマライゼーションを目指すという「運動論」でもないでしょう。目前の出来事に「なんとかしなければ」という一点に支えられた支援者の方々の「生き方」、あるいは「存在」そのものが突き動かしているのではないでしょうか。「責任感」や「担うという意識」も労働対価としてではなく、石巻の支援者の方々が示された「人として」の立場からの出発であると学ばせていただいたと感じています。

相楽福祉会は、京都、奈良、大阪にある11ヶ所の福祉事業所と協力して「東日本大震災関西障害者応援連絡会」を結成。福祉施設を中心に支援物資の輸送、炊き出し、障害のある人たちのケア等を行った。

同連絡会の取り組みとして製作販売。売り上げは支援活動に活用された。

生きづらさを抱えても暮らし続けられる地域づくりを　その①

グループホームの暮らし 地域の皆さんと、ワクワク・ドキドキできる時間をつくる

当法人は、地域食堂、直売所、居場所の運営など地域や仲間で助け合う「共助」の活動を推進しています。
2022年6月より、地域の皆さんと一緒にグループホーム(以下、GH)で過ごす取り組みをスタート。
「生きづらさを抱えても暮らし続けられる地域をつくる」その思いをカタチにすべく一歩踏み出しました。

社会福祉法人　拓く　本部長　**浦川　直人**

交通事故や病気で身体が不自由になった時、災害で住む場を失った時など、生きづらさを抱える状況でも孤立せず、家族や友人や知人など、思いやりのある人たちと過ごせたらいいな…多くの人の想いではないでしょうか。

GHの生活は「今からお風呂ですよ～、ご飯ですよ～」と、ある程度決まった時間に食事や入浴、洗濯などのルーティンで過ぎていきます。日中活動のない土日はGH内で穏やかに職員と過ごします。せっかくの週末、もっと変化に富む暮らしができないか。そこで、職員の知人や地域の人、保護者などに、「土日をGHで一緒に過ごしませんか?ご飯をつくったりして楽しみましょう」と声かけしました。そして今、３歳の子どもから80歳をこえる男女まで、幅広い年代の皆さんがGHに足を運んでいます。リビングは日常にはない高齢者の方々の談笑、「さぁ何を食べようか」と活気に包まれます。ある高齢者は障がいのある入居者に喜んでもらえるようにと、手品や手芸を披露。みんな歓声をあげて音や光にビックリしたり、喜んだり。４歳の子どもはチョロチョロと動き回ります。いつもはじっと座っている入居者も話しかけたり、転ばないかと手を出して面倒をみる立場になったり。暮らしの中にワクワクやドキドキが少しずつ生まれているようで、老いも若きも大家族のような、思いやりのある雰囲気でGHが和んでいます。

法人設立から22年、これまで支えていただいた保護者は後期高齢者になり、関わっていただいた地域の方々も80代、職員も歳を重ねています。「退院したら…亡くなったら…誰が家や家族をみていくのか?」など、悩みがそれぞれ変わり、暮らしの支援についても変化が求められます。私たちは身近な者の一人として、様々な「生きづらさ」を抱えた皆さんに向き合う時がきているのです。サービスや職員による支援というだけではなく、地域の人や保護者など、ゆるやかな大家族のようなカタチで寄り添っていけないだろうか、一歩一歩踏み出していきたいと思います。

退院後のAさん宅に沐浴の手伝いに行った「ぷらっと」のスタッフ。

この間、母親はほっと一息タイム。

休日にLeoスタッフの子どもを預かりお出かけ。Aさん宅に行き、ミルクをあげるお手伝い（中央・溝尻）。

生まれた時から沐浴や食事、お出かけと一緒に過ごし、家族のような関係です。

Leoとぷらっとが織りなす物語 その④

チーム「沐浴の会」生まれる前から、母子に「寄り添う」。

2022年5月、「出会いの場Leo」と「ぷらっとどっと」に新たなチームが生まれました。
子どもが生まれた時に一緒に喜び、気にかけて仲間になる、時間を共有する。
赤ちゃんの沐浴に通い、話し相手になったり掃除を手伝ったりと。
スタッフ、利用者の保護者らみんなで、新たな物語の糸を紡いでいます。

出会いの場 Leo　管理者　**溝尻　博子**

今年4月上旬。ぷらっとのカウンターで出産を間近に控えた母親Aさんが、「一人で赤ちゃんの沐浴ができるかな。夫は仕事で日中の話し相手もいない。今後を考えると不安」と語りました。子どもが「生まれる」時は生命の誕生という希望がありますが、半面「社会からの孤立」など小さな不安の種が大きくなり、そんな時、誰かに「助けて」と言えたら。その不安に押しつぶされる前に、距離だけではなく心や気持ちが通じ合うような隣人関係を築きたいと思いました。Aさんに、「グループLINEを作って、いつでも話せるようにしたら？」と提案。Aさんの夫、妹だけでなく、ぷらっと関係者、Leoスタッフ、利用者の保護者などが加わり、チーム「沐浴の会」を結成しました。

Aさんの出産後は「沐浴を手伝いましょうか」「話に行きましょうか」とLINEを送り合い、お昼前後や夕方の時間で誰かしら毎日顔を出すようにし、沐浴や掃除、晩御飯の下ごしらえなどを手伝っています。チームには、Leo利用者の母親で、当初は「他人との関わりは苦手」と話されていたNさんも。思いもよらないNさんのメンバー入り！Leoやぷらっとで、人と交わるうちに距離が近づいたのか、「沐浴は一番の経験者ですよ」と、支える側にさっと回り、Aさんを気にかけて足しげく通っておられます。今後は私たちスタッフが主体ではなく、保護者の方が率先して「寄り添う」ような輪を作り、広げていきたいと思います。

チーム「沐浴の会」は、産前産後のサービスが充実している日本社会でどんな意味を持つのか？「急だけど、助けてくれん？」と誰かにお願いするのは、少し煩わしいもの。対して行政サービスや民間のベビーシッターサービスは対価を支払う分、気軽に依頼できるのが良さですが、契約が切れたらそこまでの関係。人が生まれて成長する中で、ぷつぷつと途切れる契約関係だけでは、子育ての不安と孤独からは抜け出せません。そうなる前にもうひとつ「備える」ことの大切さをひしひしと感じています。

「ぷらっと」に遊びに来た家族。赤ちゃんの成長を皆で見守ります。

「ぷらっと」のカウンター

一息ついた保護者同士がお喋りする場所。

●出会いの場Leo　児童発達支援事業所
●ぷらっとどっと　出会いの場Leoに併設。気軽に立ち寄れる子どもや大人の居場所。
※当法人は、公益事業の一環として「ぷらっとどっと」の活動に参画しています。

「本業＋α」プロジェクト 4年目「α」は、身近な人の「生老病死」に寄り添う。

その人が主な収入源として働くことを「本業」。社会や地域に貢献することを「α（アルファ）」。
誰もが本業にプラスして、隣の人に、近所の人に、まちの人に寄り添っていけば、共生社会に近づいていく。
当法人はそう考え、「本業＋α」プロジェクトを発案。2018年より国のモデル事業に提起、推進しています。

本業＋αプロジェクト　代表
みんなのサロン SORA　代表　**村谷　純子**

あるとき、「生きる気力が無くなった」と、乳癌を患ったAさんの一言に、はっとしました。13年間の児童発達支援センター勤務を経て、子どもの「ケア」はできてもお母さん、ご家族、そしてご本人にじっくり寄り添えない、既存の制度内で働くことに限界を感じていた私です。「目力を付けたら前向きになれるよ」とまつ毛のウイッグを作って試したら、Aさんが「きれいになったみたい！やりたいことにチャレンジできそう」とにっこり。これがまつ毛エクステなどの施術を行う本業「美容サロン」開店のきっかけとなりました。そして、私の「α」は、癌やうつ病闘病中の方、障がい児のお母さん方に寄り添い、「これはできそう」「やってみたい」の声を拾って後押しすることです。

お客様のBさんは子宮癌を患った方でした。来店の度に「仕事の悩み」や「体調不良での育児や家事の大変さ」「自分の亡き後」などを話されて、悶々と一人で悩みがちだったので、パートスタッフとして働いてもらうことに。苦楽を共にするうちに、通院で知り合った闘病仲間も来店するようになり、Bさん自身がその方たちを支える「チカラ」になりました。徐々に体調も落ち着き始めたかなと思った矢先に再発。最期まで3人の子どもの母親として、在宅の緩和治療を希望され、それならと彼女の想いを支える「チーム」を家族、友人、SORAスタッフ、お客様で結成し、買い物、食事の準備、清拭、マッサージ、付き添いなど、励まし合いながらそれぞれができる力を集結し、約8ヶ月間の看取りをしました。

「本業＋α」プロジェクトを進めて4年。Aさん、Bさんのご家族とも深い関わりをもつようになり、結局のところ、「生老病死」に寄り添っているのだと気づきました。これからも日々精進しながら、生きづらさを抱えている人、地域の方々の人生にそっと伴走するような美容サロンを創っていけたらと思っています。

赤ちゃん用のおむつをデコレーションした「おむつケーキ」です！

スタッフのCさんは現在30歳、村谷さんが児童発達支援センター勤務時代の教え子、ダウン症の女性です。12年間無遅刻無欠勤。祖母と二人暮らしの彼女はサロンの近くに引っ越してきて、SORAスタッフやご近所さん、お客様に見守られながらサロンの徹底した感染対策消毒作業や「おむつケーキ」製作に取り組んでいます。

おむつケーキ巻き。丁寧に作業中。

サロンは、障がいのある子どもさん連れのお客様も多い。10年間親子で通う常連さんもおられ、学校生活や就業などの悩みに耳を傾け相談に乗っています。

左から、Bさんと夫、村谷さん、友人、Bさんの息子さん。